

Count in Crimes

「伝説ふたたび」

ケビン・ウェズリーは傭兵である。

傭兵とは何か？ この問いには答えるのはさして難しいことではない。生活のため、あるいは思想信条を貫くため、誰かから金をもらって軍事行動に従事する職業のこと……。そう答えれば学校の先生は満点をつけてくれるだろう。もっとも、動機に関しては前者の割合がほとんどであるので、傭兵とは戦争を食物にしている人間のことだ、と端折って説明しても八割の点は堅い。

傭兵を戦争屋と呼ぶ人もある。だが、その言説を当の傭兵たちは認めないだろう。彼らはこう訂正する。自分たちは戦争を売っているのではなく、買っているのだと。

さて。先生に満点をもらえと言ったが、それが真実を言い表した言葉だとまでは私は保証していない。実際、傭兵の境遇というのは、なかなか正しく理解されないものだ。

そもそも、傭兵と軍人の違いを認識していない人間が、世の中には意外と多い。そんな人と出くわしたとき、傭兵たちは皆、力説する。

曰く、軍人は戦争が起きなくても国家が給料を払ってくれるし、身分も保障されているが、傭兵は、戦争なくして収入なし。儀礼的とすらいえる軍事境界線での小競り合いでは、傭兵にお呼びの声はかからない。そんなときは盗賊退治をやったりもするが、その手の仕事には縄張りがあるし、盗賊行為自体の流行り廃りもあるから、あまり安定して稼げない。だから自分たちは戦い以外の仕事も、いろいろと請け負う。土木作業、機械の修理、収穫期の農家の手伝い、危険なフィールドワークに出かける学者の現地ガイド、放蕩息子の搜索……。とにかくいろいろ。だから仕事があったらいつでも声をかけてくれ と、最後に名刺か、それに代わる走り書きのメモを手渡すのである。それが傭兵の日常だ。

さて。ここで話はようやくケビン・ウェズリーに戻ってくる。

このケビン、歳は三十五、婚歴なし、遠い故郷に親を残しているがそちらは兄夫婦が面倒を見ているので気苦労がない、という身分。仕事も、広い意味で言えば自由業と呼べなくもない。才能が仕事に適さず苦しんでいるわけでもない。その束縛なき人生を羨む人もあろうといったところなのだが、実は本人は、そんな生活にそろそろ嫌気が差しているのだった。

ケビンが傭兵業を始めたのは、もう何年も前のこと。前の仕事をクビになって、街をさまよっていたある夜、バーで隣に座った傭兵に誘われたのがきっかけだ。技能面ではすぐに順応できそうであったし、駆け出しの間は組合の生活保障で必ず糊口をしのげる。これはいいと思って、ケビンはそれ以上ろくに考えもせず、ずぶずぶとその道に踏み込んでいった。

しかし、踏み入れたら二度とは戻れぬ道、というものでない。傭兵をやめようと思えば、ケビンにはいつでもそれが可能だった。それを今日に至るまで歩み続けてしまった要因のひとつは、新しい、自由な生き方ができると、最初に抱いたその幻想を忘れられなかった点にある。

今でこそ自由なケビンであるが、実は、傭兵に転職した当時はそうでもなかった。兄はまだ身を固めていなかったし、片親が難しい病に罹ったのもその頃だ。どちらに枕を向けてもストレスで眠れない日々のなかで、ケビンの自由に対する欲求は、人一倍大きく膨らんでいった。

だからである。傭兵として生活を立てられると確信したそのとき、ケビン・ウェズリーは自由の極みへと続く王道を夢想した。その幻に浸ってしまった。

しかし現実はどうだろう。たしかに選択の自由はあったが、所詮その幅は限られていることにケビンは気づいてしまった。分かれ道のどれを選んでも、どうも目的地に着きそうにない……。

ケビンの違和感は年月とともに膨らみ続け、彼を飲み込もうとしていたが、しかし彼には仕事を離れづらい理由がまた存在した。永く続いている統一国家連合とケダブル条約機構の戦争に、第三勢力が参戦したのだ。

戦乱の拡大はますます多くの兵士を必要とし、傭兵はほぼ強制的に正規軍の手伝いをする羽目になった。手続き上は、この時点でも傭兵は仕事をやめる権利を有していたが、人格の筆頭成分が義理人情であるケビンには、そんな選択はできなかった。必要とされる限り、そこにいて踏ん張ってしまう。それが彼の性分だった。

彼は戦った。地球で。月で。要塞衛星で。

そして考えていた。自分が傭兵を続けなければならない理由を。今の自分を肯定できる論理を。

やがて彼の知らないところで一時の停戦条約が結ばれ、緊張緩和によって傭兵は軍からの雇用を解かれた。自由になったケビンは答えを出さなくてはならなかった。この道を進み続けるのか。あるいは引き返すのか。

「おい、ケビン、考え事か？ 脳細胞が過熱するからやめとけよ」

ケビンの肩を叩き、彼の真面目な顔を面白そうに覗き込むこの男は、カール・ゾルトラット。ケビンの同業者で、戦友。親友といっても差し支えない間柄である。

「ちょっと、な」

ケビンは言葉を濁す。傭兵を辞めようというアイデアは、カールにもまだ話していない。彼自身を置いて他に知る者はない。

「いやいや、これは友人として捨て置けない事態だ。どうしても考えたいって言うなら、俺が頭蓋骨に入るファンとヒートシンクを買ってやるから、それからにしろ。な？」

「せっかくだが、カール、俺はサイボーグ化にゃ興味ないんだ」

「おや、らしくない。ノリが悪いじゃないか。どうやら本当に何か考えているらしいな。なんだなんだ、教えるよ」

「ああ、そのうちにな」

この戦いが終わったら。軌道ステーションに戻ったら。地球に降りたら……。

カールにだけは打ち明けようと思いつつ、ケビンはそれを何度も先送りにしてきた。しかし、設定した最終防衛ラインである地球に、彼はもう戻って来てしまった。

もう言わなければ、という焦燥感。

もう決めなければ、という義務感。

ケビン・ウェズリーはまだ、傭兵である。

序 幕

俺たちが降り立った宇宙港、バイコーニユは、統一国家連合内で最長の歴史と最大の規模を誇る。らしい。

「らしい」というのは、バイコーニユを建設したのは統一国家連合ではないからだ。暗黒時代からあったものを、統一国家連合が手中に納めて維持している。ことが暗黒時代と絡んでくると、最長の歴史というのもちょっと眉唾ものなわけだが、そう言ったほうが箔は付くし、土産物も売れるので、当地でそんな話をする奴はいない。

そんなバイコーニユのいちばんの見所は、なんといっても広大な港内商店街の賑わいだ。俺とカールのふたりは今そこを歩いている。

この界隈の軒先には、珍しい商品が所狭しと並べられているのだが、その内容は四半期で大きく様変わりする。今回は二ヵ月半ぶりの地球なので、いつものパターンに従うなら、ふたりで店を一軒一軒冷やかして廻るところだ。それなのに大人しくしている俺の様子が、カールにはよほどひっかかるらしかった。何かと探りを入れてくる。適当にあしらっていたが、その素っ気無さがまたカールの興味をそそるらしく、ついには困った誤解に行き着いてしまった。

「ああ、俺はわかったぞ。友よ、おまえ、PNGの例の黒髪秘書さんが忘れられないんだな？」

「ば、ばばばば馬鹿野郎。妙な冗談言うんじゃないやねえよ。か、彼女とはビジネスで会っただけだ。未練があるのは、お、おまえのほうじゃないのか」

凶星というわけでもなかったが、ちょっとばかし取り乱した。

「それならそうと早く言ってくれよ。水臭い。　　そうだ、贈り物をするといい。ここで買うんだ。店は……。あ、あそこがいい」

カールは勝手に決め込んで、人ごみの中を先へ行ってしまふ。しかし、要は自分が買い物をしただけなのだと、俺はちゃんとわかっているのだから、急ぐことなくゆっくりとそれを追った。早く行ったところで、物持ちをやらされるだけだ。

カールは俺より稼ぎが良かったが、気まぐれでこうしてすぐ散財する癖があるので、金に困る頻度はむしろ高い。あまりに用途が多すぎて、いつどこでそんなに使っているのか、親友の俺にもわからないくらいだ。わかっているのは、身辺に持ち物を増やす類の用途ではない、ということだけ。もちろん、流れ者の傭兵を続ける限り、そうするより他ないわけだがな。

もっとも、俺もあまり貯蓄が得意なほうじゃない。これは傭兵全般に言えることだと俺は思っている。例外には出会ったためしがない。

しかし困ったことに、まとまった金がないことには仕事の道具が揃えられない。

一口に傭兵の仕事道具といっても、人によって千差万別なわけだが、俺の場合は、世界にもう知らない奴はいない、TUというやつだ。これがまた、高い。もちろんTU乗りは報酬額もでかいから採算は合うようにできているのだが、実際にやりくりするのは難しい。長期的に見ると、稼いだ金と手元に残る金の桁はだいぶ違うのだが、短期的に見ると、一仕事終わったあとの懐はかなり潤っている。もう数ヵ月は遊んで暮らせるぜ、という金額が手に入る。一方で、仕事道具のTUを

オーバーホールなんぞした日には、それどころじゃない金額が飛んでいく。戦うための兵器に保険なんてありゃしないし、いくら大事に使っても壊れるときには壊れるものだから、そのときに困らないようかなりの貯蓄をしておく必要があるわけだ。だが、懐に金があれば使ってしまうのが人間の性だ。

そこで、傭兵組合の出番となる。組合は所属する傭兵全員に積み立てをさせている。おかげで、計算がちょっと得意じゃない俺でも、愛機の整備や部品調達をこなせている。良いとわかっていても実行できないことが世の中にはたくさんあるが、それが規則として定められていると、妥当性もともと理解しているんだから簡単に実行に移せる。不思議なものだ。この世にルールがなかったら、人という動物はもっと馬鹿だったんだろうか。

そんな物思いにふけりながら、ようやくカールに追いついた。案の定、カールの両手はすでに買い物袋と伝票でふさがっている。中身は不明。いちいち覚えていられないので、聞かないことにしている。

この調子なら店に入った口実などもう忘れていたかと思ったが、そんなことはなかった。俺は何も買わないと決意していたつもりだったが、結局、買い物袋を抱えて店を出てしまった。カールの口車に乗せられた。明らかに傭兵とわかる風体では、なかなか持ち歩くのが恥ずかしい代物だったので、店員によく頼んで、完全に外から見えないように包装してもらった。フウカ・レミントンは喜んでくれるだろう。ちらりと考える。

それから俺たちは運輸連盟の総合窓口に向かった。そこでプレゼントを発送するわけだが、元々、別の用事でそこには行く必要があった。カールはそこまで計算に入れていたのだと、港内商店街の重厚な人垣をふたりしてかいくぐりながら俺は気づいた。

窓口ではいったん別行動となった。俺はまずパキケファラス宛のプレゼントを送り、身軽になる。住所不定なので、差出人の住所は組合のものにしておいた。次に照会の受付に行き、地球に残っていた俺の TU がつつがなく配送中かどうかを確認。こちらが本来の用件だ。

もし廃業すれば、TU はいらなくなる。だから俺はオムスクの組合本部にツイペンシルを持ち込もうと考えていた。ツイペンシルを徹底的に改造した、俺の地球での愛機だ。ちなみに、宇宙では組合が軍からレンタルした TU を使っていた。自前で維持する金はない。でも、カールは最近、それを手に入れた。いや、実を言うとまだ発注段階で、現物はできあがっちゃいないんだが。

話がそれた。とにかくツイペンシルをオムスクで売りに出す。そこで売れば、俺は傭兵をやめる。売れなければ、まだ続ける。そういうルールだ。

宇宙へ上がるときには廃業の考えがなかったから、俺は迷うことなくツイペンシルをオーバーホールに出してしまった。もしかしたら無駄な金を使ってしまったのかもしれない。ともかくツイペンシルは先日までそこで保管中だったので、それを俺自身のオムスク到着日と重なるように、前もって配送の注文をしておいた。我ながら上出来だと思う。受付のお嬢さんの返答によると、今のところ、問題なく輸送中らしい。

そうすると今度は、自分をオムスクまで輸送する手段を整える番だった。便利なことに、運輸連盟の総合窓口は各種交通機関のチケット売り場と隣り合っている。別行動のカールもそこにいるはずだ。カールはイオラニアの防衛戦参加中に次の仕事の契約を済ませていて、地球に降りたのも休

息のためではなく、その仕事場所が地球上だったからというだけだ。行き先は、たしかフェニキア。議会軍と条約軍が長いこと睨み合っている地域だ。そこで発掘作業をする学者が、身を守るためにカールを雇ったらしい。余談だが、実はそのとき聞いた発掘という言葉に俺はちょっと惹かれていて、ツィペンシルの買い手が見つかったら、その手の仕事に就こうかとも考えている。

バイコーニュからオムスクまでは、エアロトレインでチェリャビンまで行って、そこからクラシクトレインに乗り換えれば、あとは寝ているだけで到着する。どちらも便数が多いから、予約はしていなかった。それが甘かった。チェリャビン方面のチケット売り場にはけっこうな行列ができていた。アナコンダも真っ青だ。俺は溜息をついて、その最後尾に並ぶ。

行列に並んでいるときにできる数少ない楽しみのひとつは、人間観察だ。俺は人間行動学とかそういう難しいことに興味があるわけじゃないが、バイコーニュのような交通の要衝には、いろいろな恰好の人間がいるので、それをゆっくり眺められるのが面白いのだ。見たことのない形式の上着、どうやってまとめているのかわからない髪型、多種多様のアクセサリ。いつも目新しい何かに出会える。三十路に入ってまだこんなことに興味を持つのは、前の職場ではまわりが制服ばかりだったことの反動だろう。

ああ、あれは特に面白い。俺はここ数年でいちばん興味深い恰好の人物を見つけた。背の高い男だ。髪はおおまかには整えているが、末端はぼさぼさ。放置しているとしか思えない。しかし服のほうは立派なもので、天然繊維のようだが、皺がない。広い袖や、背中に入った紋が特徴的だ。前から見るとどんな様子だろう。何かの拍子に振り返らないものか。そう期待していると、実際に、それが起きた。

「何か御用かな？」

注視していた男が、ビンゴで俺を振り向いた。何気ない質問のようできて、しかしこれがなかなか侮れない迫力を秘めた視線を伴っていたので、俺は慌てて首を横に振り、あさっての方向に視線を転じる。傭兵でもあれだけ強力な眼光を発するヤツはそういない。くわばらくわばら。

しかし不思議な男だ。どうして俺が見ているとわかったのだろうか。ああ、きっと連れが俺の視線に気づいて、本人に告げたに違いない。もう同じ方向を注視できなくなったので確かめることはできないが、装いに似た雰囲気のある、若い女性がそばにいた気がする。

それから一分くらいは自粛していたが、結局やることがないので、懲りずに暇つぶしを再会した。一応、さっきの方向は見ないようにして。

牛歩で行程の半分ほどを進んだ頃、俺はふと、ワームホール停戦が発効したのだということを実感した。行列の中には、ケダブル側人間がいくらか交じっていたのだ。

バイコーニュは民間企業の支配力が強いせいも、軍事色が薄く、緊張が緩んだ時期には事実上の中立地帯となる。そんなときはケダブル条約機構から旅行者や貿易商がやって来るという話だったが、今回はそれに加えて、ちらほらと軍人や傭兵らしい姿があった。時代は激動しているのだな、と俺は改めて認識した。前線にいては知ることのなかった変化だった。

ようやくチケットを手に入れた俺は、カールと落ち合い、屋外の連絡通路に出てエアロトレインのターミナルに向かった。絶え間のない航空機やUVの発着音が空を覆い、すぐ脇の道路では、ちょっとしたアパートほどの輸送車両が地鳴りのような低周波とともに行き来している。

そろそろ、言わなければ。タイミングを窺いながら、しかし俺はどう話を切り出すべきかわからないでいた。今更打ち明けても、それまでに装弾がなかったことでカールは気を悪くするかもしれない。いっそ言わないほうがカールのためかもしれない。そんな、普段なら考えもしないようなことで悩む。

「不思議だな」

倉庫区画の前まで来たとき、カールが呟いた。倉庫区画に寄ったのは、カールがそこに保管していた地上用 TU をフェニキアまで持って行くからであって、何も不思議じゃない。俺はカールの正気を疑う顔をする。

「ケダブールのだぞ、あれ」

カールは倉庫区画のゲートから顔をそらし、背後の道路を今しがた走り去った、巨大な車を指さした。構内では大型車両ほど速度規制が厳しいので、まだ遠くには行っていない。

言われて見ると、たしかにケダブール独特の曲面の多い形だった。もっとも、カールはエンジンが何かの音で違いに気づいたようだったが。

「TU を積みそうだな」

観察した感想を素直に口にして、俺はようやくカールが不思議と言ったわけがわかった。いくらバイコーニュでも、ケダブールから TU クラスの大型兵器の持ち込みがあったとは聞いたことがない。

「見た目では三機まで積みそうだが、車体の沈み具合からすると、実際に積載しているのは二機だな。積荷が TU であれば、だが」

「隠密行動中だっていうのか？」

「いや、そこまではわからないな。許可が出ているのかもしれないし」

俺が波乱の予感を覚えている傍らで、カールはもはや興味を失ったらしく、倉庫区画に入っていく。手続きはすぐ済む。カールがツィガンを引っ張り出してくるまで、五分もかからないだろう。そこで俺は、徐々に小さくなっていく TU 輸送車らしきものを眺めて待つことにした。

耳を塞ぎたくなるようなブレーキ音を立ててそれが急停止したのは、カールが消えてから一分と経たない頃のことだった。

二 幕

大型輸送車を停車させたのは、臨検を叫んで急に進路上に割り込んだ議会軍の TU、ベーチュオンだった。気づいたのは俺とカールだけじゃなかった、ということだ。

積荷を見せろというベーチュオンの指示に、輸送車側は従わなかった。本当に臨検の権限を持っているのか、と反駁したわけだ。まずいな、と俺はそのとき思った。案の定、二、三の言葉の応酬ののち、ベーチュオンは手にしていたソーナッターを振り上げ、荷台を切り裂こうとにじり寄せた。俺が道路脇から見ていたのはそこまでだ。

そして俺は、カールから TU を借りた。

カールの TU、ツイガンを起動させて現場に駆けつけると、やはりそれはもう始まっていた。TU 同士の睨み合いだ。もう何回か打ち合ったあとかもしれないが、いずれにも大きな損傷は見当たらない。手遅れじゃないってことだ。

ベーチュオンと対峙しているのは、いかにも条約軍風の TU で、バヨに似ていた。ベーチュオンと比べると背丈がふたまわりほど小さいが、その両腕には棘つきの鉄球が仕込んであり、貧弱な印象はない。カールは二機積んでいるだろうと言ったが、動き出しているのは一機だけだ。

あたりには、その二機以外にもいくつかの TU の姿があった。すぐ目に入ったのは、ツイタデルの改造機と思しき機体。しかしこれは、遠巻きに事態を眺めているだけで、一方に加勢するとか、騒ぎを止めようとかいう意図は見えない。他の TU も同様に野次馬に徹するつもりの方だったので、俺はそいつらに注意を払うのをやめた。

建物の合間を縫って跳躍し、今にも刃と鉄球を交えようとしていたベーチュオンとバヨもどきの間に割って入る。右腕の balanседカタールでベーチュオンのソーナッターの軌道をそらし、一方のバヨもどきの接近を振動破碎槍で牽制。そして俺は外部スピーカーをオンにした。

「やいやい、おまえらやめないか。どんな事情があるのか知りゃしないが、真っ先に他人様の事情ってのを考えやがれ。 だいたい、ここはパイコーニュだ。大陸じゅうのみんなの生活を支えている場所なんだ。つまりだ。ここだけじゃなく、大陸じゅうに迷惑かけているんだぞ、おまえさんたちは。それでもまだ矛を収めないつもりなら、この無敵の傭兵ケビン・ウェズリー様が相手になってやるぜ。どうだ!？」

しばし沈黙。その間、俺は深く反省する。勢いに乗って、ちょっと言い過ぎてしまった。

反省の時間は、ベーチュオンの猛攻とバヨもどきの強襲によって終わりを告げた。そして始まったのは悪夢だ。

なんといってもベーチュオンの動きは早い。バヨもどきの相手をしつつソーナッターの連続攻撃をかわすなんてことは俺には無理で、四度目の攻撃で右胸のエジンマフラーを切断されてしまった。カールになんて謝ろう、なんて心配している暇もなく、さらにバヨもどきの棘つき鉄球がツイガンの膝をしたたかに打ち、完全に体勢を崩される。そしてとどめといわんばかりに繰り出されたベーチュオンの回し蹴りが、ツイガンの鳩尾に入り、ツイガンと俺は背後の金網を突き破って倉庫の壁に倒れこんだ。その衝撃で、頭をどこかにぶつける。

「そこで反省している、ウェズリー伍長」

気が遠くなるなか、俺は幻聴を聞いたようだった。

おかしい。前の職場 議会軍にいたのは、もう昔のことなのに……。

三 幕

俺は嘗倉で目覚めた。いや、違う。留置場か何かだ。俺はもう軍人じゃない。

意識がはっきりしたときには、俺の前に小さな机と椅子のセットが用意されていて、向かいに男が立っていた。俺より十年か二十年長く生きているようで、制服からして、どうも警察官らしい。するとやはりここは留置場か。

俺は思わず頭を抱えた。といっても、頭の怪我のせいじゃない。気を失うほど強くぶつけたわりには、痛みはもう感じなかった。気づけば包帯が巻いてある。処置が早かったのだろうか。

バイコーニュの施設を破壊した罪人。それが俺の置かれた立場らしかった。ベーチュオンとバヨもどきの決闘は、俺が気絶してからほどなく収まったらしく、施設に最も被害を出したのはツイガンの転倒であつたらしい。すなわち最も罪が重いのは俺なのだと、警察官　アーサー・アルザスという名が制服に刺繍されていた　は説明した。そしてバイコーニュでの施設を損ねることが、どれだけ多くの人々の生活に影響を与えるものであるかを、俺が今まで受けてきたどの説法よりもくどくどと語ってくれた。拳句には、息子が傭兵に憧れて困っているという話を始め、俺みたいに他人様の迷惑になるようなことだけはやめてほしいのだが、と深い溜息をつく始末だ。

「議会軍のパイロットと、あのケダブールの TU のパイロットも、ここにいるのかい？」

アルザスのおっさんが一呼吸置いたチャンスを逃さずに、俺は尋ねてみた。そもそも、どちらかが勝って収まったのか、制止の声を聞き入れて両者が矛を収めたのか、それすら聞いていない。

「俺に職務規定違反をさせたいのか？　まあ、野放しにはしてはいいない。それは確かだ。バイコーニュは法治都市だからな。　　そうそう、法的にはおまえさんにも弁明の権利があるんだ。なにか申し開きがあるかね？　ケビン・ウェズリー」

いや、何も。そう答えればいいのに、俺は間違ってしまった。

「俺は喧嘩を止めに入ったんだ。無理に感謝してくれとは言わないが、もうちょっと友好的態度にならないもんかな」

この失言がなかったら、俺はあと一時間早くカールとの面会を果たせただろう。いや、まだ厳密な法的処理の段階ではないから、あれで罰金が増えたかもしれない。その経緯を聞いたカールは、腹を抱えて笑った。

「おまえ、あいかわらずバカだな」

「つい、な。でも本当のことだぜ。俺は仲裁に入ったんだ。見ているだけの TU とは違ってな」

「その様子がきっちり記録に残っていればいいんだがなあ。俺のツイガンの記録映像じゃ証拠にならないし……」

「あ、そうだ。俺はおまえの TU を壊しちゃったことを、謝らなきゃいけないんだ。すまない」

俺は言葉だけでなく、心底そう思っていた。ただ修理費を出せばいいという問題じゃない。カールはあのツイガンで仕事をする予定が入っているのだ。それも、今日のうちに TU と一緒にフェニキアに向かわないと、間に合わない。エアロトレインの貨物車両では、あのエンジンマフラーの修理は難しいだろう。

「そのことなら気にするなって。膝さえ直せば動かないってわけじゃない。エンジンエンジンが所定出力を出せなくても、俺のツイガンは盗賊の旧式 TU には負けないぜ」

「いや、しかしな」

「いいって。本当言うとな、俺はちょっと感心しているんだ。あの二対一の状況下で、ダメージをあの程度に抑えられたのは、おまえの腕あってこそだ。もっとも、ツイガンを熟知した俺なら、負けなかったんだけどな」

カールは自慢げに笑ってみせる。俺はだいが気が楽になった。

「じゃあ、ツイガンはどうする？ そのまま持っていくのか？」

「いや、その件はあとだ。今は、おまえの様子をしっかりと見ていた商人を探そう。罰金を払うのは今のおまえの財布には厳しいし、だいいち、スジじゃない」

「待て待て。予定じゃ、そろそろ発つ時間だろう」

「出発を遅らせた」

「俺のために？」

「俺のためじゃないから、そうなる理屈だ」

「悪い」

「気にするなって。今夜のうちに発てば間に合うんだ。それまでに、俺は録画に映っていたツイタデルを探す。というか、そのパイロットだな。一通りチェックした中じゃ、あれがいちばん探しやすいそうだ」

俺は頷く。たしかに、あの初期モデルのツイタデルはだいが前に生産中止になっている。現役稼働中のものは珍しいから、見た人間の記憶によく残るだろう。それにあの背中の砲のインパクトがあった。ツイタデルシリーズの一般的な仕様じゃないから、他と取り違えるという心配もなさそうだ。

「じゃあ頼むぜ、カール。で、俺はどうすればいいんだ？」

「ここでオネンネしてるしかないだろ？」

その軽口が出たところで、面会時間は終わりになった。

カールの背中を見送ったあと、それまでずっと座りっぱなしだった俺は、尻が痛くなっていたのでちょっと横になった。硬く冷たい寝台だったが、痔になるよりはマシだ。TU に長時間乗りすぎると痔になるというが、あれは本当だろうか。そんなことを考えているうちに、俺は眠ってしまった。

どれくらい経っただろう。目覚めた俺は、持ち物を没収されているうえに、外からの日差しがないので、今が何時なのかさえわからなくなっていた。近くに警察の姿はない。人の動く音もしない。このあたりにいる人間は俺ひとりだけらしい。

「カールには迷惑をかけちまったな」

俺はひとりごちる。

いつかこの借りを返さないといけない。しかし、傭兵を辞めたなら、どうやって借りを返せるというのだろうか？ この俺が、腕も見てくれもいいあいつに、一体何を与えてやれるというんだ？

四 幕

朝が来た。昨日の警察官が下りて来て 予想はしていたが、ここはやはり地下だった それ
がわかった。釈放だ、とアーサー・アルザスは言った。

耳から入ったその言葉を、俺の脳が理解するまで、少しタイムラグがあった。なにせ、中途半端
に眠ったのと、カールを待ちわびる気持ちで、夜はほとんど眠れなかったのだ。ああ、硬い寝台も
一役買っていたのを忘れるところだった。刑務所じゃないんだから、寝台くらいマシなものを設置
すべきだと俺は指摘したい……が、まず口にするべきは別のことだ。

「ようやく俺の正当性が理解されたか」

胸を張って、俺はおっさんを見返す。面会の受付時間の都合で顔は出せなかったが、昨夜ぎりぎ
りまで粘ったカールが例のツィタデルのパイロットを捕まえて、話をつけてくれたに違いない。俺
は心からカールに感謝しながら、おっさんが昨日の態度をどうにか言い繕おうとするのを待った。

しかし。期待は裏切られた。

「何の話だ？」

警察官アーサーは首を傾げる。

「昨日面会に来た、カール・ゾルトラットという男が、証人を連れ来ただろう。それで、俺がここ
から出られるんだろう？」

「ああ、カール・ゾルトラットだな。その名前はしっかり覚えているが……。証人？ 夢でも見た
んじゃないのか。あの男は、あれから戻っていないぞ」

「そうか、あんたは知らないのか。まあいいさ。上で他の誰かに聞けばわかるぜ」

「何を言ってる。ここに詰めてるのは俺を入れて四人だけだ。しかもバイコーニュの大運動会で三
人四脚の五連覇を飾った、完璧なチームワークが俺たちの誇りだ。公私を問わず、互いに知らない
ことはない。カール・ゾルトラットという男がここに来たのは一度だけだ」

アルザスは俺以上に胸を張って断言した。

「嘘だ。あんた、ハブられてるんだよ」

言いながら、俺はだんだん不安になってきた。このおっさんが悪ふざけで事実を隠しているの
でないとすれば、一体どうして俺は釈放なのか。俺はまだ、罰金を払うとは言っていない。かといっ
て、強制徴収は法律違反だ。そんな無法がこのバイコーニュでまかり通るはずがない。だいたい、
その法治精神のために俺は捕まったのだ。

「まだ寝ぼけているらしいな。おい、おまえさんの荷物、全部ここに置いておくから。ちゃんと
揃っているか確認して、サインして出て行ってくれよ」

「え、罰金はどうなったんだ？」

「やれやれ、記憶喪失ごっこかね。罰金は、おまえさんのお友達が今朝一番で払いに来たよ。昨日、
そのための言伝をカールって男に頼んだんだろう？」

そういうことだったのか？

おっさんの誤解はともかく、カールが俺の釈放の手筈を整えてくれたことは確からしい。代理を

頼んだくらいだから、もう本人はフェニキアに向かうエアロトレインの中だろう。しかし、その代理って一体誰だ？ 罰金の支払いはカールの懐から出たのだろうか？

ぼうっとした頭のまま、持ち物を確かめることだけはちゃんとやり、煩わしい思いで書類にサインした。そして俺は釈放された。

朝の八時だった。

迎えは誰もいない。カールが支払いを頼んだヤツは、そこまでの義理はないと判断したんだろう。俺がその立場なら絶対にそこまで付き合うが、ま、他人に基準を押し付ける気はない。

ひとまず俺はチケット売り場に行くことにした。昨日買ったぶんはおじゃんになったので、チェリヤビン行きチケットを買い直さないとイケない。ついでに、カールが何かの伝言を残していないか、その筋に当たってみよう。実は、傭兵が多用する有形無形のネットワークというヤツがあるのだ。あとで組合から手数料を取られることもあるので、確実にリターンが見込めるときしか利用しないものなんだが、しかたない。

「待たれよ」

俺が重い足取りで歩き出すと、誰かが誰かを呼び止める声があった。

「おぬしのことだ。待たれよ、傭兵殿」

今度はもっと近い位置で声がした。誰かの手が、背後から俺の肩を掴もうと近づいてくる。新手のすりか、勧誘か？ 聞き慣れない方言だし、ろくな輩じゃあるまいと思った俺は、振り向きざまにその手を叩いた……と思ったら、失敗していた。俺の手首を、背後からの手がしっかりと掴んでいる。

「耳が遠いのか？」

俺を見下ろす視線があった。初めて見る顔じゃない。昨日、チケット売り場で目を合わせてしまった、あの珍しい民族衣装の男だ。だからこれで二度目。

待てよ、本当に二度目か？

俺は昨日のことを思い出す。チケット売り場じゃない。留置場に入れられたあとでもない。ツイガンに乗っていた間のことだ。ベージュオンに吹っ飛ばされた俺は、頭を打って、議会軍将校の幻聴を聞き、そして……。最後にこの男の顔を見た。

「あんた、昨日……」

俺は思い出した。男はそれを悟ったらしく、笑みを浮かべ、俺の手首を掴みなおして強引に握手をした。

「拙者、オグ・アム・イトウと申す」

ツイガンのコクピットで昏倒した俺をいち早く助け出してくれたのがこの男だ。つまり、頭の傷がたいして痛まないのも、このオグ・アム・イトウのおかげというわけだ。ち、しまった。気絶寸前の記憶をすぐに取り戻していれば、カールにはツイタデルよりこの男を捜してもらったのに。

「よく覚えていないんだが、どうも世話になったみたいだな。この包帯もおまえさんが？」

「拙者は運び込んだだけだ。礼がしたいなら病院に行くといい」

「いや、あそこですぐにコクピットに駆けつけてくれるヤツはそういない。助かった」

「相身互い。持ちつ持たれつだよ、ウェズリー殿」

「ん、どこで俺の名前を？」

「堂々と名乗りを上げていたではないか。その後の顛末は残念であったがな」

ああ、そうだった。昨日の失態を思い返し、俺は暗鬱とした気分になる。まったく、なんということだろう。あのとき近くにいた複数の TU 乗りが、俺の名を無様な負け犬として記憶してしまったのだ。こうなっては、ツイペンシルに買い手がつくのを待たずに廃業することになるかもしれない。

「ウェズリー殿。そう気を落とすことはない」

オグ・アムは俺の肩を叩いて元気付ける。

「実はな。無礼を承知で呼び止めたのは、是非おぬしに会いたいという者がいるからだ。チケットを買い直す前に、会って行かれぬか？」

いったい誰だ？ そう訊ねようとした俺の横で、大音量、低周波のブレーキ音が響く。見ると、目の前に小山のような大きさの車が停止していた。

それは紛れもなく、騒ぎの只中にあったケダブールの TU 輸送車だった。

五 幕

傭兵というのは、何も統一国家連合にだけある職業じゃない。現代特有の職業というわけでもないから、そうすると当然、大昔に源流を同じくするケダブル条約機構にも同業者がいておかしくないという理屈になる。そして実際、俺は何度か戦場でそれらしき連中を見かけたことがある。だが、ケダブルの傭兵と生身でご対面するのはこれが初めてだった。

傭兵団レグラヌーズ。TU 輸送車をバイコーニュに持ち込んだ連中は、そう名乗った。

俺は今、彼らの TU 輸送車 ポチオという名らしい の運転室に招き入れられていた。運転席じゃない。運転室だ。それくらい広い。そもそもこのポチオ、車というよりも陸に上られる船といったほうがじっくりくる内部構造で、ここもブリッジと呼んだほうが適切かもしれない。

運転室にいるのは俺とオグ・アム・イトウ、そしてレグラヌーズの傭兵三人の、合計五人。すでに互いに自己紹介は済んでいる。

室内で最も高い位置にあり、最も豪華な席に陣取っている女が、団長のホリネ・ホリ八。昨日カッとなってついつい TU を持ち出したのは彼女らしい。歳は、うん、そうだな、三十かそこらだろう。小規模の傭兵団だということを差っ引いても、頭にしては若い。もっとも、麗しのフウカさんよりは年上であるに違いないんだが。

「ホント、すまなかったと思ってるよ。あのときは、なんというか、その、興奮しててね」

ホリ八は両手で顔を隠して、ヤダアタシったら、などと微笑みながら恥じ入ってみせる。この歳でそれができるのは文化の違いか？ なかなか顔を現してくれないホリ八の様子に俺がたじろいでいると、入り口のドアに背を預けていた眼帯の男、コッシュ・コッソンが沈黙を破った。

「団長は……、いや俺たちは、詫びをしたいと考えている。バイコーニュの施設破壊は議会軍にそもそもの原因があるが、仲裁に入ったあんたの TU を傷つけたことについて、奴だけじゃなくこちらにも落ち度がある」

コッソンは壁から離れ、背筋を伸ばす。俺よりも長身だ。オグ・アムと同じくらいだろう。これまた同様によく体を鍛えているのが、露出した二の腕からわかる。より迫力があるのはどちらかという、いかつい顔と眼帯でコッソンに軍配が上がる。自己紹介によれば、元は将校だったという。さもなりなん、といったところだ。普通の人間は、街中でこの男が通りかかったらこぞって距離をとるだろう。

そのコッソンが、怖い顔をして数歩近づいてくる。詫びって、言葉通りの意味に受け取っていいのだろうか。背後にオグ・アムが立っていなかったら、俺は後退りしていたかもしれない。

「ダメだよ兄貴、びびらせちゃ」

少年の声が出た。このポチオをリアルタイムに運転中のブシー・ブモクだ。彼は数段低いところの運転席に座っているので、背の低さも相まって、ほとんど姿が見えない。自己紹介が終わってからは顔も見えていない。

「悪いねお客さん。この人いつも怒ったような顔してるんだけど、ちょっと表情筋が壊れているだけだから。だから気楽にしててよ。別に敵対国の傭兵だからって、取って食べようなんて考え

「じゃないんだ。そうだよ、ホリ姐？」

「そう、そうだよ。ブシー坊やの言うとおりに」

ようやくホリ八が現実に戻ってきた。

「もうお察しのこととは思うけどさ、アタシたちはシルダリヤ基地に向かう予定なんだよ」

「っていうか、もう向かってるけどね」

「ちょっと黙ってな、ブシー」

「ひえ」

ホリ八が低い声を出したのでブシーが縮こまった。ようだった。なにぶん見えないので想像になる。

「シルダリヤ基地といや、地球府のモンだよな」

地理に疎い俺は、オグ・アムをふりかえって小声で確認する。オグ・アムは小さく頷いた。顔を戻すとホリ八が何度も大きく頷いている。

「そう、地球府のシルダリヤ基地。だからさ、そこまでボチオで乗せて行ってあげるよ」

「はあ？」

俺は意味がわからなくて思わず素っ頓狂な声をあげてしまった。その瞬間、コッソンがじろりと俺を睨んだような気がして、慌てて咳払いをする。

「ええと、話がどう繋がったのか俺にはよくわからなかったんだが……」

「停戦監視団に参加する予定なのだよ、彼らは」

後ろでずっと黙っていたオグ・アムが口を開いた。

「ああ、なるほどアレにね。それでバイコーニュに TU を持ち込めたし、ああいう騒ぎにもなったわけか」

このときようやく俺は昨日の事件発生のいきさつを理解した。俺ってけっこう頭いいんじゃないか、と思える瞬間だった。ただ、この一瞬の思考の流れをトレースするには、ちょっと予備知識をおさらいする必要がある。停戦監視団が何か語るには、まず停戦のことから説明しないとイケないからだ。

今次停戦は、ワームホールの異状を重く見た三勢力が、地球府を証人として停戦条約に調印したことで成立した。これは実に劇的で奇跡的なできごとだった。俺は見えていないが、調印式の様子は全世界に報道されたらしい。

しかし、それで皆さん万歳というわけにはいかなかった。急造の条約では緩衝地帯の設定が曖昧で、条約発効時点での実効支配線が地図上でどこを走っていたか、なんてことで三勢力が揉めるのは必至だった。特に統一国家連合やケダブール条約機構なんてのは厳密にいうと一枚岩じゃないから、戦争続行を目指す連中が緩衝地帯で何をやらかさかわからない。かといって、予防のためにそれぞれが偵察部隊を配置して見張るんじゃあ、結局その偵察部隊同士が交戦することになる。現場の人間にその意志がなかったって、悪意のあるヤツがそう偽装することは簡単だ。

そこで、本気で停戦を維持しようとしている連中は考えた。中立の地球府がその監視行動にあたればいいと。地球環境の再生と維持に心血を注いでいる地球府としては、前々から戦争を迷惑に思っていたから、停戦が長くなるのは都合がいい。そもそも調印に立ち会ったのは地球府だったわ

けだから、メンツってもんもあつただろう。だから地球府が監視を担当するって基本方針はすぐに決まったらしい。停戦条約締結を現実のものとした各勢力の主流派もこれを支持した。

これは確かに名案といえなくもないが、ちょっと無謀な話だった。なにせ地球府には、自衛隊たるシューカーを除いて戦力らしい戦力がない。そのシューカーは地球府のへその防衛やワームホールの監視で手一杯だから、各地の緩衝地帯に割ける人員はない。力の裏づけがない停戦監視団なんて、機会あらば戦争を続行しようっていう連中にかかったら無力なものだ。遭難に見せかけて監視団を攻撃、なんて事態が目に見えていたから、停戦維持派はこれにも対策を講じたわけだ。それが、義勇兵や傭兵を募っての停戦監視団の編成。

地球府は急いでスタッフを集めようと方々にアナウンスをしたから、俺も傭兵組合経由で誘いのメールを受け取った。軌道ステーションで何日もシャトル待ちをしていた頃だ。しかし俺はもう廃業するか、そうでなくても当面は楽な仕事をしたいと考えていたから、そんな面倒に巻き込まれること請け合いの仕事は即座に拒否した。以来、停戦監視団の応募状況やは全く耳に入れていなかったのだから、シルダリヤ基地が停戦監視団の拠点として選ばれたことも知らなかった。その知識さえあれば、いくら停戦中とはいえパイコーニュがケダブールの傭兵 しかも TU 付き を公に通したことも不思議じゃない。シルダリヤ基地への移動手段としてパイコーニュは欠かせない拠点だから、特例として、統一国家連合も許可したんだろう。もっとも、傭兵は通せてもさすがに正規軍は許さないみたいだが。

で、ここでようやくあのベージュオンに繋がる。パイコーニュとシルダリヤ基地の間だけのこととはいえ、議会軍としては、ケダブールの軍事関係者に勢力圏の内情を見られるのは避けたい。もし停戦監視団がふりだしで崩壊でもすれば、領内に敵対分子が紛れ込む危険も考えられる。そこで、口実は何でもいいから妨害活動をやろうということになる。個人でそう考えるのか組織がそう決めるのか知らないが、とにかくプランは実行に移された。それが昨日のあの事件。正式な許可を得たレグラヌーズの TU 輸送車ボチオを、密貿易の車両と勘違いした議会軍将校が、正義の心でもって悪事を白日のもとに晒そうとして攻撃を加えたわけだ。

まったく、あいつらの考えそんなことだよ。

「どうした、ウェズリー殿」

オグ・アムに声をかけられて、俺は自分が沈黙していたことに気がついた。視線が痛い。ブシー坊やまでもがこっちに顔をふりむけている。

「え、えーと……。昨日のいきさつや、あんたらがシルダリヤ基地に行く事情ってのはよくわかった。で、わからないのは、あんたらに詫びてもらうのにどうして俺がそこまで付き合わなきゃいけないんだ、ってことなんだが。俺はオムスクに行く予定があつてよ、あまり回り道はしたくないんだ。あんたらの気持ちはじゅうぶんを受け取ったから、ここで俺を降ろしてくれないか？」

「え、もうハイウェイに乗っちゃったよ。まさか真ん中で停めるだなんていわないよね？」

ご機嫌斜めになったブシーが運転画面に視線を戻す。ブレーキをかける様子はない。眼帯のコッソンはあいかわらず怖い顔でこちらを見ており、ホリハはなぜか瞳を潤ませている。

「俺、まずいこと言ったかな」

助けをオグ・アムに求めると、オグ・アムは頭を垂れた。

「すまぬ。拙者は、てっきりおぬしも停戦監視団に参加するものと勘違いしていた。そのように彼らに説明してしまったのも拙者だ。それで彼らはそのつもりで……。いや、まことにすまぬことをした」

再び正面を向いたオグ・アムの顔に、口ぶりほどの反省の色はない。

気まずい沈黙が続いたが、やがてコッソソが咳払いをした。もうちょっと遅かったら団長さんがすすり泣きはじめるところだった。

「どうしてもというのなら、あと六キロも行けば、ボチオも止められる大規模な休憩所がある。そこで二人とも降りるといい。荷物のことを考えると、あんたがそこで降りるのは得策と思えないが……。まあ、土地勘のあるオグ・アムと一緒にいられるだろう」

俺はそこで首を傾げる。

「おい、オグ・アムさんよ。ようやく不自然なことに気がついたんだが、あんたはなんだって、一緒に乗っているんだ。昨日、若い女とチケットを買っていたじゃないか」

「ああ、あれは彼女のチケットだ。拙者のぶんではない。拙者はちょうどこちらに用があったので、おぬしを案内するついでにそこまで便乗させて頂くことにしたわけだ。快諾してくれたレグラヌーズの三人には感謝の言葉もない」

「なーに、相身互いだよ、イトウ殿」

ブシーが口真似をする。どうやら「相身互い」はオグ・アムの口癖らしい。きっと俺を連れてくるよう頼まれたときに、使ったのだ。そのことに気を取られたので、俺がオグ・アムとあの若い女との関係を知るのはいづれのことになる。

「オムスクという所には、どうしても行く必要が？」

だいが落ち着きを取り戻したホリ八が、懇願するように俺を見つめる。その後ろでコッソソが俺を睨んでいる。ブシーの言葉によればただ見ているだけらしいが、やはり俺には睨まれているようにしか感じられない。

「んー、そ、そうだな。シルダリヤ基地の先にあるタシケントからなら、オムスク行きの飛行機の便がある。だから時間のあるときに俺をそこまで送ってくれるなら、ひとまずシルダリヤ基地まで一緒に行っても……」

「本当？ ええ、是非そうすべきよ！」

「わ、は、はい。そうします」

噛み付いてきそうなホリ八の勢いを前にして、俺は思わず了解してしまった。

六 幕

オグ・アムを休憩所で降ろしたポチオは、再びシルダリヤ基地に向けてハイウェイを轟進しはじめた。

俺は運転室から出て、屋根に上がった。無理に変なところに登ったわけじゃない。梯子が付いて、まさに甲板のように設計されていたのだ。そこで俺は沿道の深い森を眺めている。オグ・アムがいなくなって、ケダブールの人間に囲まれているのが心細くなった、というのも動機の一部だろうが、何より、ちょっと考え事をしたかったからだ。

そこで反省している、ウェズリー伍長。

ベーチュオンに敗北し、気を失う寸前に見たオグ・アムの顔は、見間違いではなかった。なら、そのちょっと前に聞いたような気がする声もまた、幻聴ではなかったことにならないか。聞こえるはずがないと思っていた声が、実は本当にあそこで発せられていたのだとすれば。俺の軍での階級を知っている人間がベーチュオンに乗っていたのだとすれば。その条件でリストアップされる名前はいくつかあるが、記憶に残る声音からさらに絞り込むと、答えはひとつになる。

「マティアス・ドゥプラ少尉か」

士官学校を出たエリートだった。部隊の編成当初、ツイーダ強襲型を使っていた頃から、ドゥプラ少尉のTU操縦技術は水準以上で、特に格闘戦のセンスには定評があった。あのままエリートコースから脱落していなければ今頃は、地位から見ても、技量から見ても、ベーチュオンを使うにふさわしい将校になっていることだろう。いや、最近では決戦を意識した議会軍が主力上位機種を増産させているから、イブシロノンに乗っていてもおかしくない。

レグラヌーズのバヨもどき、バコと、あのベーチュオンの戦いは、未決着のまま終わったという。もしパイロットがドゥプラ少尉だったなら、果たしてレグラヌーズをそのままにしておくだろうか。ドゥプラ少尉の執念深い性格が、前と変わっていないなら……。

木々が視界を過ぎ去る速度が急激に遅くなった。ポチオが減速したのだ。休憩所は通り過ぎたばかりだから、ハイウェイで減速する理由は故障か渋滞くらいしか思い当たらない。しかし道は混んでなどいない。

「故障か？」

甲板の手すりに備え付けられた車内電話のマイクを手に取り、俺は呼びかける。操作は間違っていないかったようで、運転室のプシーからすぐに返事があった。

「違うよ。違う。オレがブレーキを踏んだんだ」

「どうして？」

「どうしても何も。上にいるんだったら、その目で見ればわかるじゃないか。正面、正面」

生意気な少年に説教のひとつも垂れようかという気持ちが湧いたが、どうやら非常事態が起きたようなので、俺は努めて冷静に、プシーに言われたとおり前を見る。俺の視線の先にはガラガラに空いたハイウェイの路面と、そして構築されたバリケードがあった。

嫌な予感が当たってしまった。バリケードは議会軍のナギタンク二両とベーチュオンによって構

成されている。直立状態のナギタンクの壁は高い。ポチオで強行突破するのはまず無理だろう。なにより、ベージュオンが見逃してくれるはずがない。

俺の背後でいかにも強力そうなモーター音が鳴りはじめた。ポチオが荷台のハッチを開放にかかったのだ。

「ブシー、バコで出ようとしているのはホリ八か？」

「そうだよ。もうホリ姐ったら張り切りすぎなんだから。 ケビンにも責任の一端があるの、わかってる？」

「ああ、わかってるよ。これは、俺が決着をつけなきゃいけない問題なんだ」

「え、なんだって？ なんだか会話がずれている気が……」

「だからブシー、俺にバコを貸してくれ。もう一機あるはずだ」

「バカも休み休み言ってほしいな。ケビンにケダブールの TU が操縦できるわけ？」

「それは……」

なんとかなる、と啖呵を切りたいところだが、昨日調子に乗りすぎて痛い目に遭ったばかりだ。それで俺は必至に考える。TU がなくとも、ベージュオンと対決できる方法を。

いや、やっぱり無理だ。TU には TU で対抗するしか、俺には方法がない。

そのとき、車内電話に短いノイズが入った。

「ケビン・ウェズリー、早く格納庫に來い」

コッシュ・コッソンの声だった。バコに乗せてくれるということか。聞き返す間も惜しかった俺は、マイクをその場に放ると、梯子を下り、格納庫へと通じているらしい扉をくぐり抜けた。

俺が運良く迷わず格納庫の上階に行き着くと、コッソンが待ち受けていた。側面が開放された格納庫からは、すでにホリ八の乗り込んだバコが消えており、手前に広々とした空間が広がっている。しかし後部には、まだ二機の TU が残されていた。もう一機のバコと、ツイガン。エンジンマフラーの亀裂を応急処置で塞いであるのが見えるから、カールの機体に間違いはない。

「どうして、ツイガンが……」

「ゾルトラットという男から預かった。 詳しい話をしている暇はない。早く乗れ。それなりの整備はしてある」

言い終える前に、コッソンは残るバコのコクピットに向かって走り出している。俺もそれ以上の説明を求めるつもりはなく、全力でツイガンへと走った。

七 幕

「懲りないヤツだね。アタシらが停戦監視団の募集に応じてシルダリヤ基地に向かっているってこと、バイコーニュでちゃんと聞かなかったのかい？」

ホリハのバコが、鉄球をかざしてベーチュオンを威嚇している。

「ケダブールの痴れ者め。ワームホール停戦などというまやかしに乗じて、我が統一国家連合の内情を探ろうなど、魂胆が見え透いているのだ！ シルダリヤ基地に向かうという話自体、疑わしい！」

ベーチュオンは右手のソーナッターを宙に突き出す。いかにもドゥプラ少尉のやりそうな宣戦布告だ。声といい、やはり、間違いならしい。

「そうかい。そっちがその気なら、もう容赦はしないからね。覚悟しな！」

もはや話し合いの余地はないと判断した両者が激突する。俺のツイガンはエンジンエンジンの不調で初期加速ができず、援護が間に合わない。当然、ツイガンより鈍足のバコに乗っているコッソンのもまた、側面に回りこめていない。俺は舌打ちした。

ホリハはバコの鉄球を腕から射出し、ソーナッターの間合いの外から先制攻撃をかけた。ベーチュオンはこれをぎりぎりのところでかわし、鉄球とバコとを繋ぐワイヤーが伸びきったところでそれを切断する。ホリハはその間にもう片腕の鉄球を発射するが、ベーチュオンはこの第二撃にも見事に対応した。腰を落として鉄球を肩の装甲で受け、ホリハが鉄球のワイヤーを巻き戻す前の、無防備のタイミングを狙ってソーナッターで斬りかかる。

しかしホリハも並の腕ではなかった。ワイヤーの引き戻しをすぐに諦め、飛び膝蹴りでベーチュオンを迎え撃つ。鉄球のものより大きな棘の付いた膝は、運動エネルギーを得てじゅうぶんに強力な武器となり、襲ってきたソーナッターの刃を砕いた。こうなると完全にバコの間合いだ。ホリハはここぞとばかりに追撃を加えるが、ベーチュオンはフレキシブルスラストの加速力を活かして離脱。致命傷を避ける。

ここでようやく追いついた俺は、振動破碎槍を振り回してベーチュオンの反撃を封じる。

「下がるんだ、ホリハ。ヤツとの決着は俺がつける！」

「え、ケビンさん？ どうして？」

「団長、まずは下がってください」

「うわ、こら、何をするのコッソン！ アタシはまだ戦えるわよ！」

「修理するブシーの身にもなってください」

「知るかそんなもの！ アタシはケビンさんと一緒に戦うの！」

「団長……」

背後で繰り返される主従の争いは無視し、目の前のベーチュオンに集中する。刃の欠けたソーナッターでも、まだ相手は戦意を失っていない。

「マティアス・ドゥプラ少尉！」

俺はベーチュオンに向かって叫んだ。俺が議会軍に所属していたころ、同じ TU 部隊にいた士官

の名を。

「訂正しろ。今は大尉だ」

ドゥブラ大尉が不機嫌そうに応答する。

「 同姓同名、ただの騙りかとも思ったが、その声、その低知能は正真正銘のケビン・ウェズリーに違いないようだな」

「もうやめないか。せっかく停戦になったっていうのに、こんなところで争って何になるんだ。馬鹿馬鹿しい」

「バイコーニュで教育してやったというのに、その意を理解できないどころか、よもやケダブールの者と徒党を組むなど……。傭兵とは浅ましいばかりでなくこうまで愚かしいものなのか」

ベーチュオンはソーナッターを水平に倒し、左手を添える。議会軍採用の OS にはプリセットされていない、ドゥブラ特有の構えだ。

「変わらない。まったく変わらないな……。ドゥブラ大尉、あんたのおかげでわかったよ。俺は傭兵になったことを後悔していない。あんたみたいな人間が出世する軍に、俺の居場所があるはずなかった」

「負け犬ほど……、良く吠える！」

ベーチュオンが突進してくる。

フレキシブルスラストの推力を集中させたその加速力に、エンジンエンジンの万全でないツイガンで追従できないのはわかっていた。そこで俺は反射的に振動破碎槍を前に突き出してみたが、ドゥブラがその先端をソーナッターで弾き押しのかけて、こちらの懐に飛び込んだところで見事な連続攻撃をかけてくるという一連のシーンが一瞬で頭の中に浮かんだ。

だから俺は、振動破碎槍が空中で横一文字になるようにふわりと放った。ちょうど、ベーチュオンに対して陸上競技のハードルのような恰好になる。ベーチュオンは機敏に反応してそれを跳び越えようとしたが、長い足を振動破碎槍に引っ掛けた。上体の姿勢がずれ、ソーナッターが空を切る。俺はそこに balanседカタールを突き出して、ベーチュオンの右肩、ホリ八の攻撃で装甲のひしゃげた弱点を狙った。すれ違いざまの攻撃は、見事命中した。

ターン、減速して体勢を整えたベーチュオンだったが、右腕はだらりと垂れていた。駆動系の切断に成功したらしい。これでソーナッターは封じた。そして俺のツイガンとコッソンのバコが前後を挟んでいる。

「決着がついたな、大尉。負けたとなっちゃ、もう命令無視のバリケードなんてやってられないだろう？ あんたがふりがざしていたのは、勝者の理屈だ」

俺は balanседカタールの構えを解くことなく、少しずつコッソンと包囲を狭め、ドゥブラに封鎖解除を促す。

「ふいふいふいふ……。ははははは……」

悪態でもつくのかと思ったら、聞こえてきたのはドゥブラの笑い声だった。

「おい、ケビン。こいつ、気が触れたのか？」

俺は答えられなかった。負けを知らなかったエリート士官のマティアス・ドゥブラ大尉が、馬鹿にしていた傭兵に打ち負かされたことで、どこかのネジが飛んでしまった……。そういう想像も決

して突飛ではないだろう。だが、俺はまた悪い予感がしていた。ドゥブラは昔から自信家だったが、かといって無策の男ではなかった。頭が回るのは、確かなのだ。そうだ、こんな状況ならあいつは……。

「畜生、後ろか！」

「撃て！ 殺して構わん！」

「バリケードの陰に！？」

「ケビンさん！」

絶叫が錯綜し、銃火が走る。

二両のナギタンクの陰に隠れていた、二機のツィーダと歩兵たちが、それぞれの火砲で攻撃を開始したのだ。最初の攻撃でコッソン機が脚をやられ、仰向けに倒れた。ホリハは無防備なコッソン機を庇うため、装甲の厚そうな腕を前にして盾となる。火線はもちろん、パコばかりでなく背後のポチオをも狙っている。

そんななか、俺はナギタンクめがけて突っ込んだ。ドゥブラに当たるのを避けるためか、俺は最初の攻撃で狙われなかったから、それが可能だった。さすがに距離の半分を踏破するころには火線の一部がポチオから俺に焦点を移したが、望むところだった。俺はコクピットをツィガンの腕でカバーしつつ、ナギタンクに迫った。

ツィーダの片方が武器をヒートナッターに持ち替えて立ちはだかる。その間も、もう一機のツィーダがナギタンクの陰から援護射撃をしているので、ツィガンの装甲は一秒ごとにどこかが剥がされ、吹き飛ばされ、穴を穿たれた。

俺はバランセッドカタールでツィーダを捉えようとしたが、突きを繰り出す前に、その刃が砲弾によって砕かれた。続いて襲ってきたヒートナッターをツィガンの腕で受け止めたが、硬直状態を狙った援護射撃で股関節をやられ、膝をつく。上から押し付けられたヒートナッターはどんどん腕に食い込み、溶断していく。腕が切断されれば、その先はこの俺がいるコクピットだ。しかし、もう為す術がない。

これで、俺の傭兵人生も終わりか。

最期を覚悟して、俺は自問した。満足だったかと。

傭兵になったことは間違いじゃなかった。それはもう確信できたことだ。これからどう生きるか、その答えは出せなかったが、ここで終わるのなら答えなんて不要だ。両親には兄夫婦がいるから問題ない。心残りといえば、フウカ・レミントンにまた会いたかったという、それくらいだろうか。あ、カールに借りを作ったままだった。それはちょっと癪だな。それから、オグ・アム・イットウと連れの女の関係も気になる。あれは嫁さんか？ それとも似てない妹か？ 謎の多いヤツだったな……。ああ、俺、けっこう未練あるじゃないか。参った。

そのとき、空から蒼い TU が降って来た。

細身のその TU は路面に直接着地したのではなく、直立状態のナギタンクを慣性で蹴倒し、その反作用で今度はツィーダのほうに躍りかかる。今度も路面には着地せず、ツィーダの頭を踏みつけて、そのまま空中で一回転してやっと地面に両足をつけた。

俺はそこでようやくその TU の全身を視認できた。独特の細い腕、たわんだ円筒のような脚部、

ゴーグル状のセンサーレール。どれも PNG-U1 シリーズの特徴だ。しかし、肩にはヴィンデのベーチュオンと同じパーツが移植されていて、PNG 純正機種でないのも明らかだ。

蒼い TU は背中から棍棒のようなものを取り出した。いや、どちらかというとならば剣だろうか。それを今しがた蹴飛ばしたツイーダのうなじのあたりに突き刺すと、刺されたツイーダは突然力尽きたように関節のロックが外れ、路面に這いつくばる。それを見届けることもなく謎の TU は身を翻し、残るもう一機のツイーダと対峙する。

ツイーダは手にした機関砲で闖入者を打ち倒そうとした。謎の TU はそれを最小限の動作でかわし、次の瞬間いきなりツイーダの懐に飛び込んで、機関砲を持った右腕の、肘の辺りを打つ。途端に機関砲は弾を吐き出すのをやめ、関節が外れたかのようにツイーダの右腕は固まってしまう。謎の TU がさらにツイーダの首筋に得物を突きつけると、糸の切れた人形のように、このツイーダもその場に崩れ落ちていく。まだ直立しているナギタンクの陰には歩兵たちが残っていたが、このツイーダが彼らの上に倒れかかってくることに気づくと、号令でもかかったように一斉に銃器を放り出して、一目散に逃げ出した。

俺は骨の髄から震撼した。これは、ひところ噂になった、あの……。長大な放電棒を自在に操る、PNG-U1 系の改造機。各地の戦場に出没し、火炮を使う TU ならば相手を問わず行動不能にして帰ったという、幻の TU。その行為は「火炮狩り」として興味と恐怖の対象となった。

しかし、俺はずっと、そんなものは無数の戦場伝説のひとつか、マスコミのでっちあげだと思っていた。だが、実在していたのだ。目の前にいるこいつこそが、それだ。こいつが「火炮狩り」の張本人。

しかし何故、こいつは都合よくここに現れたのだろうか。要注意人物であるドゥブラの動きを見張っていたのだろうか。いや、違う。シルダリヤ基地に向かうこの道は、停戦監視団に加わろうとするたくさんの TU 乗りたちが通るのだ。足取りを追わせないことで有名な「火炮狩り」が、こんな場所でのんびり監視なんて真似をするはずがない。

監視。停戦監視？

俺は悟った。「火炮狩り」は、地球府の呼びかけに応じて停戦監視団に参加したのだ。レグラヌーズとドゥブラの騒動を昨日のうちに知った停戦監視団は、ドゥブラの暴走を憂えて「火炮狩り」をこのあたりに待機させていた。すでに停戦監視団の一員として公認されているなら、身を隠すのはドゥブラたちに対してだけでいい。その程度なら、この森の豊かな地域では簡単だ。

「火炮狩り」はこちらに背を向けたままだ。おそらく歩兵たちの武装解除を見届けているのだろう。もう、この場は収められたようなものだろう。

そういえば、レグラヌーズの三人は、ボチオは無事だろうか。幸いにもツイガンの首はまだ動き、俺は彼らをふりかえることができた。そして、見た。健在の左手にソーナッターを持ち替えたベーチュオンが、密かに「火炮狩り」の背中から飛びかかろうとしているのを。

「危ない！」

ツイガンが動かないので、俺には叫んで警告することしかできなかった。だがそのときにはもう、ドゥブラのベーチュオンがソーナッターを振りかぶっていて、直立不動の「火炮狩り」が今から動いてそれをかわすのは無理というものだった。

刹那、青白い光が見えた。

時間が止まったんじゃないかと俺は疑った。ベーチュオンが「火砲狩り」の肩にのしかかるようにして、動きを止めていたからだ。しかし、やがてベーチュオンがツイーダたち同様に事切れ、ベーチュオンの腹を突いた得物を「火砲狩り」が背中にしまうのを見て、それが錯覚だとわかった。「火砲狩り」はドゥプラの不意打ちも見切っていたのだ。

今度こそすべて片付いた。まずは命の恩人に礼を述べようと、俺は「火砲狩り」に呼びかけた。「すまねえ。おかげで命拾いした。へへ、しかし伝説の『火砲狩り』に助けられるなんてな。墓まで持って行ける自慢話ができたぜ」

「火砲狩り」はこちらをふりむいた。そして俺の前まで歩いてきて、左手を差し延べてくれる。ツイガンが自力で立ち上がれないのを外傷から見て取ったのだろう。俺は切断されていないツイガンの左手を差し出した。すると……。

「いやなに、相身互いだよ。傭兵ケビン・ウェズリー殿」

「火砲狩り」はツイガンの手を取り、無理矢理に握手した。

終 幕

再び走り出したポチオの運転室で話を聞いて、俺は自分が「火砲狩り」に助けられて感動したことを、だいぶ後悔した。

サブ라우、いわゆる「火砲狩り」の乗り手が、オグ・アム・イトウであったことは言うまでもない。さらにトサカに来ることは、レグラヌーズの面々はすでにそれを知っていたのだ。「あんた、本当に知らなかったのか？」

コッシュ・コッソンは怪訝な様子で俺に聞き返したものだ（そう、新たな発見だったが、コッソンは怪訝な顔もできるのだ）。それも頷ける。なにせ、レグラヌーズの三人が口を揃えて言うには、バイコーニユでホリハとドウブラの闘争をやめさせたのが、他ならぬオグ・アムのサブ라우だったらしい。

俺が気絶寸前にオグ・アムに助けられたと思っていたのは勘違いで、実のところは、こういうことらしい。サブ라우で二機の動きを止めた後、公衆の面前で生身を晒したオグ・アムは「そういえばあの傭兵は無事であろうか」などと呟きながら、ツイガンのコクピットに入っていった。そのとき、気を失っていた俺は物音で気がついたが、助けが来たことに安堵してまた眠りに落ちたのだと。

そんなことがあったのなら、レグラヌーズとオグ・アムが知り合ったのも当然のことだし、罰金をカールに代わって払ったのは誰かという疑問も、留置場を出てすぐの俺に誰が声をかけてきたか思い出せば、それが答えだ。さらには、証人探しに奔走していたカールがあいつらに出会ったと考えれば、ポチオにツイガンが預けられていたことも合点がいく。カールが仕事に使うはずのツイガンをどうして俺に残していったのか、それだけが謎のままだが、元来カールは気まぐれなヤツだから、真剣にあいつの動機を考えようなんて気にはなれない。つまり、不思議なことなど何もない。「だからさ、アタシたちとしては、ケビンさんがオグ・アム・イトウの正体を知らないだなんて、夢にも思わなかったわけですよ。とても仲が良さそうだったし」

ホリハは興奮気味に、ほとんど中身の変わらない話を繰り返している。ツイガンを大破させてしまった俺が、シルダリヤ基地で地球府に頼み込んで機体の修理をしたいと言って以来、ずっとこの調子だ。

そのままいるとレグラヌーズに入団させられそうだったので、俺はトイレに行くとホリハに嘘をついて、格納庫に逃げた。

格納庫ではブシー坊やが難しい顔をしていた。壊れたバコの修理に必要な部材と期間、そして人手を計算しているのだという。俺も蜂の巣になったツイガンを見ると溜息が出る。カールになんと言えればいいんだ……。俺の懐事情もかなりやばい。

ちなみにブシーがここにいるので、運転は今、コッソンのやっている。本来が持ち回りらしい。ホリハがそれに加わっているのかは甚だ疑問だ。

ブシーは仕事に夢中で俺の存在が頭から抜けているようだったので、俺は甲板に上がった。運転室とトイレと格納庫を除くと、もうそこしか行くところがなかったからだ。

甲板ではオグ・アムが景色を眺めていた。実を言えば、それを知っているからこそ運転室でホリ

八のお喋りにつきあっていた。なんだか俺は、こいつに馬鹿にされたような気がして、できるだけ顔を見ないようにしていたのだ。

命の恩人だというのに。

それは自分でもよくわかっている。だから、オグ・アムを避けようとする自分の気持ちがなにより腹立たしい。

「まだ怒っているのか、ウェズリー殿」

オグ・アムは背を向けたままでも気配で誰かわかるらしかった。

「いや、怒っちゃいない」

俺は嘘をついた。

「シルダリヤ基地で TU を直したら、どうするつもりだ？ やはりオムスクに行くのか？」

「何も決めていない」

また嘘をついた。たったひとつのことだが、俺はもう決めているのだ。まだしばらく、傭兵を続けてみよう。ただ、停戦監視団に参加するかどうかは、まだわからないが。

「時に、ウェズリー殿」

「ケビンでいい」

「では、ケビン。おぬしは約束を守る男か？」

俺はその質問の意図が読めなかったが、これは嘘を混ぜてはいけない問いだと感じた。だから反射的に、何の加工もしていない、本音そのものを口にした。

「あたりめえよ。このケビン・ウェズリー、他人様との約束を破ったことは一度もねえ。そしてこれからもそうだ。どんな約束だって守る」

そこでオグ・アムはふりむいて、微笑んだ。

「安心した。正直、こんな約束は守ってもらえないのではないかと、心配していたのだ」

オグ・アムはなにやら紙を指でつまんで、それをひらつかせている。チケットよりは大きい。どうも書類のような気がする。

「なんだ、それは」

俺はオグ・アムから書類をひったくると、頭からそれを読んだ。

「我、地球府発行の募集要項に記載された契約内容をすべて了解したうえで、停戦監視団への参加をここに申請する。申請者氏名……。おい、これ、どういうことだ！」

もちろん最後の部分は書類の文句じゃない。申請者氏名の欄に俺のサイン 正真正銘、俺の筆跡だ が書かれていることについて、オグ・アムに説明を求めたのだ。なにしろ俺は、こんな契約をした覚えはない。

「シルダリヤ基地の停戦監視団採用責任者カミラ・カルタ・アルタミラの受諾印が押され、そして保証人としてバイコーニュ駐在の地球府職員アーサー・サルサ・アルザスの捺印もある。もちろん偽造でもなく、有効な書類だ。ちなみに拙者の直筆の推薦状も別途添付されている。正式な手続きはシルダリヤ基地に着いてからになるが、それはレグラヌーズの三人にしても同じことだ。君自身から約束は絶対に守るという意味確認も取れたことだし、君はもう立派な停戦監視団の一員だよ、ケビン」

耳元の髪を風にたなびかせるオグ・アムはいかにも涼しそうだ。その背後、ポチオの向かう道の先には、地球府のシルダリヤ基地が待っている。

かくして彼はオグ・アム・イトウと出会い、停戦監視団への参加を果たした。

ひとりの伝説は終わりを迎え、そしてふたりの新たな伝説が始まる。

それはまた、ひとつの悲劇の始まりでもあるのだが、それを語るのは、今日ではない。

彼の名はケビン・ウェズリー。

誰がなんと言おうと、傭兵である。